

9月19日(日) 16:20~17:20 第1会場(福岡サンパレス 2F 大ホール)
座長：九州大学医学研究院 基礎医学部門 医療経営・管理学講座 准教授 鮎澤 純子

SL2

過剰な医療行為・薬物療法を考える—Choosing Wisely の活動から—

こいずみ しゅんぞう
小泉 俊三

一般財団法人 東光会 七条診療所 所長/
Choosing Wisely Japan 代表



21世紀の医療は、生物科学と医療テクノロジーの驚異的な発展に基礎づけられた20世紀の医療とは大きく異なる方向に展開せざるを得ない。ゲノム技術やICT、AIに代表される科学のフロンティアへの期待が語られる一方、少子高齢化、地球環境問題、更には健康格差をもたらす格差社会の現実、高所得国、中・低所得国を問わず、深刻な社会問題を引き起こしている。

このような時代にあって、特に米国では医療提供体制のあり方に対する危機感から、医療界のリーダーの間に医療職の社会的責任を問う声が上がっており、2001年、「新ミレニアムにおける医のプロフェッショナリズム—医師憲章」が起草されて医療界に大きなインパクトを与えた。

この医師憲章を日々の医療現場で実行に移すこと、特に、限りある医療資源の適正利用の観点から、過剰な医療行為に警鐘を鳴らすべく、2012年に始まったのが米国内科専門医機構財団が主導する「Choosing Wisely」キャンペーンである。中でも、抗菌薬をはじめとする薬物の適正使用に関しては、重点課題として多くの「実施しないことを推奨する」「リスト」が複数の学会から提唱されている。

講演では、上記の如く、先進国を中心に過剰医療に対抗する啓発活動が世界的に展開されてきた経緯を跡付けるとともに、北米から始まり、現在、国際的に展開されている Choosing Wisely International、2016年に設立された Choosing Wisely Japan の幾つかの取組みを概説し、具体的な課題としてである Polypharmacy (多剤併用)、過剰なスクリーニング検査や画像診断、各種の intervention などに対する取り組みの現状を紹介する。

また、COVID-19に直面して、昨今、メディアにも取り上げられている「受診控え」をはじめとする過少医療の問題や医療機関の逼迫も含め、COVID-19下の「Choosing Wisely」のあるべき姿や今後の展開について、健康格差と「健康の社会的決定要因 (SDH: Social Determinants of Health)」、国際連合が提示している「持続可能な開発目標 (SDG: Sustainable Development Goal)」を含む幾つかの視点から論じたい。

略歴

1971年 京都大学医学部 卒業
1972年 大和高田市立病院 内科医員
1974年 大阪赤十字病院 麻酔科医師 (非常勤)
1975~76年 米国 Youngstown Hospital Association (Ohio) で外科系一年目臨床研修
1976~80年 Yale 大学関連 St. Vincent's Medical Center (Bridgeport, CT) で一般外科研修修了
1980年 天理よろづ相談所病院腹部一般外科 医員 (1984年より総合診療教育部副部長を兼任)
1994年 佐賀大学医学部附属病院総合診療部 教授 (2006年より病院長補佐、学長補佐を兼任)
2011年より 一般財団法人東光会 七条診療所 所長

専門医資格等：

米国外科専門医 (American Board of Surgery, certified 1981, re-certified 1988)

所属団体等：

米国外科学会正会員 (Fellow of American College of Surgeons)
米国総合内科学会 (Society of General Internal Medicine) 会員
米国内科学会 (American College of Physicians) アフィリエイト会員
日本プライマリ・ケア連合学会 顧問
日本医学教育学会 名誉会員
医療の質・安全学会 理事
医療安全全国共同行動 専務理事
Choosing Wisely Japan 代表